

御言葉もなし。其故御禮不申上候。其後北國平均し、彦三は切腹又は可爲遠島と相極候處、高德公強て御詫言にて御預けに成り、其より御家臣に成り、賀州河北郡にて上納の知行三萬三千石賜る。然るに其子彦三、無類の虚氣にて七千石被下候。三代めの彦三に四千石、弟清兵衛に千石被下候。

清兵衛は織田河内守養子に成て江戸へ出る。其千石を伊織に被下候。其清兵衛に河内守名跡不立して立歸る。又千石被下候。太閤の奥方は木下法印といふ人の女也。太閤信長公にて二三十石の時、法印は五百石許にて、秀吉は小身なれども發明もの也、可立身とて婿にして木下氏を譲る。高臺院殿の事也。台徳公の御しうとめ故に、大坂落城の時も高臺院は無恙で、城州伏見より大坂迄の川の兩岸の葭の運上銀二貫目を被進、高臺院殿歿後も此運上をば女院へ被進候。

一、奥村因幡の使者振り  
大猷院公薨後に微妙公御登城被成、御歸館の後御直書御文筈へ入れられ、奥村因幡に酒井讚岐守殿へ持參候様に被命、留守ならば封のまゝ林惣右衛門・江見太右衛門兩人の内に可渡置との仰也。因幡持參候處留守故、林惣右衛門に渡之、

御文宮御封の儘請取置候と證文を取て參上之。微妙公御ほめ被遊候よし。此話前にもみえたり。小異あり。

一、篠原勘六・篠原掃部の勇氣  
高德公能州松百浦にて、橋上より大鱈を御釣被成、御悅無限御引擧被成、今少しに成候時絲斷て鱈落たり。篠原出羽守其時勘六とて御側に居申候。忽ち橋下へ飛下鱈を捕へたり。乍然水深く溺れて死んとす、何も飛入り援けたり。公役に立べきものと甚だ感じ給ふ。篠原彌助無子、勘六を養子に可仕とて篠原勘六と稱す。其後彌助に實子出生、是織部なり。此織部十二三歳の時、瑞龍公御前にて鐵炮にて被遊候鷲を、織部捕へて押へけるに、鷲織部手を取しがめ、爪を打立てたり。其爪手の内へ五分許も入けるに、織部顔をしがめず押へ居たり。公御看届、役に可立せがれ也と御ほめ被成。

一、矢木六郎左衛門御救の金子拜領  
延寶三年乙卯、御旗本小十人矢木六郎左衛門勝手不如意に候間御救可被下とて、本郷御邸迄罷越す。井上勘左衛門取次して其日はかへす。翌日勘左衛門へ、半田權佐を以て奥村因幡返答を被申含申遣す。あなたこなたと有之、畢竟金子五

十兩被遺事濟。

一、井伊掃部頭は利根者

大猷院公薨御の後微妙公は、井伊掃部頭は扱も利根成者也。大猷院様御存命の内は、我等へ目をも見掛ぬ様にし、唯今はこぼれかゝる様にする也。御坊幼ゆゑに我等などが氣を取り、腹をたてぬ様にするは御奉公也と御意被成候。

一、微妙公、井伊掃部頭へ御挨拶

微妙公へ或時井伊掃部頭殿御見廻、御着座の所へ公御慰斗鯁御持參也。掃部頭殿是は忝き儀と謹で御戴被成候。公御挨拶に、日外上様忝き上意有之時、我等耳聞え不申候處、御自分脇より上意の趣被仰聞候が、謹に奉承知一代の芳志を得申候と御意の時、掃部殿左様に御意被成候儀にては無御座候。却て致迷惑候とあり。興村因州

一、酒井讚岐守、微妙公御見廻の事

酒井讚岐守殿毎々御見廻。或時は微妙公御式臺迄爲御迎御出被成、扱々忝しとて手を御取被成書院へ御通もあり。又は御庭へ御出被成、讚州書院へ御通りの後緩々として御出座被成、御出に付路次の掃除申付、御出も不存不罷出候と

仰の事もあり。

一、木村重成は木村主計の甥

高德公越前府中に被成御座候處、木村加兵衛といふもの女を持たり。加兵衛後知 行三百石。其女を一向坊主へ嫁しぬ。此坊主一揆を催し、死罪に行はれ跡絶えたり。此坊主の子長門守にて、木村を名乗る。加兵衛女、長門をつれて秀頼公の乳母に出たり。後稱宮内卿。木村主計は加兵衛が子也。瑞龍公へ出頭し二千石被下候。公薨後に、大坂冬陣に御暇を乞ひ大坂へ行きぬ。此等見 于前。夏陣の時遁出て御家へ歸る。三百石被下、寛永年中病死す。彌五作は主計子也。

一、瑞龍公幽囚の石田三成へ御對面

關原敗軍の後、瑞龍公へ家康公より於大津石田治少へ御對面可被成と被仰遣。案内は井伊兵部少輔也。木村主計に御刀被爲持、御長屋の内へ御越被成候。前に新敷筵をかけ、其内に三成綸子の茶色に菊桐の紋所ある小袖にて、首がねさゝれて有之。公不及是非仕合と御挨拶の所、治少は面を低てもいはず。其まゝ御歸被成候と、主計常に話よし。

被稱瑞龍右衛門時。彦右衛門は主計をいひ也。